

haben完了に生じた「再分析」について：どのような意味的变化が生じたのか

その他のタイトル	Über die "Reanalyse" des haben-Perfekts : Wie hat sich die Konstruktion semantisch umorganisiert?
著者	金子 哲太
雑誌名	独逸文学
巻	59
ページ	95-121
発行年	2015-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017959

haben 完了に生じた「再分析」について

— どのような意味的变化が生じたのか —

金子 哲太

1. 序

ドイツ語の haben 完了は、一般に、対格補語をともなう所有構文が、何らかの影響を被ることで、SVOC 構造から SVO 構造へと変貌を遂げることによって成立したとみなされている。Paul や Behaghel はつぎのような例を挙げて説明している。

ich habe das Buch gefunden < „ich habe das Buch als ein gefundenes“
er hat es gefunden < „er hat, er besitzt es als gefunden“
順に Paul 1959, S.137, Behaghel 1924, S.271から

現代語では過去分詞は動詞行為を表わすが、このようにそれ (gefunden) は元来対格目的語の補語として働いていたとされる。しかしドイツ語史の早い時期に構造的変化が起こり、過去分詞は主格主語との関係を結ぶようになった。同様の現象はあとで触れるように、ラテン語からロマンス語への発展過程においても生じた。ここに想定される重大な改新は、ふつう「再分析」(Reanalyse)、「新解釈」(Umdeutung)¹などと呼ばれる。

それではここにどんな意味の変化が認められるのであろうか。本稿では、現在完了が担う2つの重要な意味構成要素、すなわちアスペクト性、時間性に焦点を絞って意味分析を行なう。²2つの意味的側面にどのよう

1 Vgl. Nübling 2008, S.252, Kuroda 1999, S.59, Dal 1966, S.122. また荻野 2003年、63ページ参照。

2 本稿のテーマには、これまでに発表した拙論 (2008年、2009年、2011年) の主張と重なるところがある。しかし考察対象を、十分に扱いきれなかった、形式と

な関係が認められるかを共時的、通時的に探ることで、古高ドイツ語期以降さらなる発展を遂げるこの形式の本質的部分を浮かびあがらせる手がかりとしたい。

2. 再分析について

ドイツ語の現在完了がいつ最初に現われたのかという問いには、さしあたって古高ドイツ語期³と答えることができる。しかしどのような経緯で出現したのかという問いとなれば、そう容易に答えることはできない。2つの完了形のうち *sein* タイプのほうはただしその出現プロセスをより想定しやすい。形式的にはまったく同一の *sein* を用いた受動の迂言的表現が古いゲルマン諸語に見られる⁴ため、この点に鑑みただけでもまずはゲルマン語内部に出現の経緯を求めることができるからである。

しかし *haben* タイプの完了については、内部発生説だけでも統一した見解には至っていないというだけでなく、外部からの影響を考慮せざるを得ない。⁵ 古アイスランド語や古ザクセン語にも *haben* と過去分詞との結びつきが見られるという事実がある一方、同時期のラテン語では形式的にきわめてよく似た *habeo* + 過去分詞という完了の改新形をすでに発達させているからである。ラテン語聖書の翻訳のさいにこれを模倣したとみられる箇所が見受けられたり、当時教会や官庁で用いられた公用

しての意味に絞り、分析結果を先行研究の成果と照らし合わせることで問題点を浮かび上がらせ、新たな解釈を提案する試みである。

3 この歴史段階は、750年～1050年頃と考えるのがもっとも一般的である。時代区分の議論については次を参照。Schmidt 2000, S.30ff.

4 例えばゴート語については次を参照。Streitberg 1910, S.192. なお、*sein* が自動詞の過去分詞と用いられる例はゴート語にも見られるが、それらは再分析を起こす前の各要素が自律して用いられるケースである。

5 Vgl. Brinkmann 1965, S.34, Ebert 1978, S.59, Besch 2009, S.152. 内部発生の契機としてバンヴェニスト (2000年、195ページ) は、*sein* 受動 (*ist getan*) が必然的に *haben* 完了 (*hat getan*) を用意したとする。嶋崎 (2004年、104ページ) も同様の主張である。

語がラテン語であったことを考えるとこの権威言語 (Prestigesprache) からの影響を度外視するわけにはいかない。

いずれにしても、古高ドイツ語期に、過去領域を表わすための唯一の時制形式であった過去形には表現の可能性が一つ増えたことになる。出自についてはさておき、haben 完了が初出するこの時期には、完了形の歴史に入るまえの姿を示しているとみなされる原初的形態が散見される。つぎに見るように、haben と過去分詞との結合というおなじ形成方法であっても、構造的には別の内容をもった形式とみられる例が見受けられるのである。

- (1) inti quidu mineru selu: sela, **habes** managiu guot **gisaztiu** in managiu iar (Tat.105,2) 私は自分の魂に言う、魂よ、お前には何年分にかたつてのたくさんの蓄えがある (=貯められた状態でもっている)。
- (2) joh Kristes todes thuruh not ther liut sih **habet gieinot** (Otf.IV.1.2) そして人々は必然的にキリストを死に至らしめることに意見が一致したのである。

Tatian (830年頃) の例(1)は、キリストが自分の教えを聞こうとしない人々にたとえ話をする箇所である (ルカ書12章19節)。ある金持ちがある年に豊作となり、収穫物などの財を収めるための建物を作る決心をし、それができたときの状況を想定して発言している。ここで使用される形式は、現代語で逐語訳すれば *hast...gesetzt* となるが、それは自分を表わす「お前」が「蓄えをためた」という完了的、過去の行為を表わしているわけではなく、蓄えが十分にあることを言っている。この文の本動詞はあくまでも haben であることはまた、(gi-)sezzen の過去分詞 *gisazt* が対格目的語 *managiu guot* 「たくさんの蓄え」に合わせて形容詞的に性、数、格の一致を見せていることからもうかがえる。⁶

6 過去分詞が屈折する例は他にも見られる (28.1; 102.2 usw.)。しかし、過去分詞が対格目的語と一致の関係を見せるという理由だけで、完了形の例に相当しないという証拠にはならない。韻文学である Otfred では脚韻を踏ませるために形容詞変化をしていると見られる例が3例現われる (Otf.I.4.53; IV.15.55; V.7.29)。

一方例(2)は、Otfrid (870年頃)の第4巻冒頭部である。第4巻ではキリストが過越しの祭り6日前にベタニアに入ったあと、磔にされ、埋葬されるまでが描かれる。冒頭ではまず、司祭がキリストを死に至らしめる計画を立て、民衆もキリストの死に同意していることが述べられる。ここでは例(1)のような解釈はまったくできない。この動詞 *einon* は、現代語の再帰的な *einigen* 「意見が一致する」と同じような用法で現われていることがわかるからである。ただしここでは「一致する」対象は前置詞 *über* によらず属格形 (*Kristes todes*) で表示されている。対格目的語の再帰代名詞 *sich* が *der liut* 「人々」の所有物ではないことは、この文が、*haben* のヴァレンツを構成しているのではなく、*einon* が自らに必要とする3項、主格主語、再帰代名詞、属格目的語をとった文構造であり、動詞行為は主格主語と関係を結んでいることを意味する。

再分析がいつ起きたのかについては、いま挙げた2例だけを見ると作品が書かれた830年頃から870年頃に生じたと発生時期を狭められるように見える。しかし実は、9世紀初頭に記された *Exhortatio* に現われる1例はラテン語の現在完了に対応していたし、⁷ また9世紀後半の *Muspilli* では、所有の対象となる対格目的語が用いられない例がすでに現われる。それらの例からは主格主語の能動的行為を読み取るしかない。したがってこの改新はさしあたって古高ドイツ語初期から中期頃に生じたと考えて良いであろう。

さてこの構造的転換では、統語的に見れば、一方で *haben* が所有の意味を失って機能的役割に転じ、他方で過去分詞が主格主語と能動的関係を結ぶようになったと見なされる。しかし、過去分詞の態の転換と *haben* の助動詞的役割が見られるからと言ってここで直ちにこの統語単位に積極的な文法表示機能を認めるわけにはいかない。⁸ 文法形式としての地位を獲得するには、使用動詞が多様化することや使用環境が広が

7 Grønvik 1986, S.36. また *Tat.* においても、ラテン語の完了形に *haben* 形式を対応させている箇所が見られる。*Tat.* 28.1; 149.4等。

8 この改新は、一つの発展段階 (*Entwicklungsstufe*) を成し、すでに文法化への道 (*Weg zur Grammatikalisierung*) を形作っているとみなされる。Vgl. Zeman 2010, S. 185, Besch 2009, S.151.

ることあるいはそれらが限定されることで、使用される局面がますます増加していくことによって強化される必要がある。

3. 再分析のさいに生じた意味的变化 その1

3.1 5つの意味単位

再分析を起こす前の形式は、haben においても過去分詞においても各々の成分の本来の意味機能を保っているの、「現在時制であり、補語を伴った分詞的構文」(präsensische, prädikative Partizipialkonstruktion) などと呼ばれる。⁹ 定動詞は所有の意味をもった haben であり、所有の対象物は対格目的語で表わされる。一方、過去分詞は対格目的語に対する同格補語としての働きをもち、受動関係を結ぶ。時制はあくまでも現在である。現代語で見るとならばつぎのような例にあたる。¹⁰

- a) Wir **haben** den Laden heute bis 8 Uhr **geöffnet**.

「私どもの店は今日は8時まで開店しています」

- b) Er **hat** seinen Namen in Marmor **gemeißelt**.

「彼は大理石に名を彫り込ませた表札を用いている」

いずれも『独和大辞典』1990年、957ページ

例 a)、b) どちらも、主格主語と対格目的語とのあいだに構成されるべき所有関係は含意的あるいはやや転義的であるが、他方で、対格目的語と過去分詞には受動の関係が見られる。過去分詞が表わすのは、行為の完了あるいは結果的状态であるが、行為の動作主は主格主語によっては表わされない。というより、そもそもこの解釈が成立する典型的な特徴

9 Zeman 2010, S.184.

10 ここに挙げた文は、コンテクスト次第では現在完了の文とみることができる a) 「私どもの店は今日は8時まで営業いたしました」 b) 「彼は大理石に自分の名前を彫り込んだ」。所有構文が現在完了文かについての議論はここでは立ち入らないことにする。これについては池内(2010年)を参照。

として、主格主語が動作主でないこと、あるいは行為と動作主との関係が非表示であることが挙げられる。¹¹ とくに例 b) では、(完了の読みが成立しない限り、) 彼の名を彫り込んだ人が彼自身なのかほかの誰かなのかはまったく問題とならない。

ここで注目しなければならないのは、これらの文に認められる時間性とアスペクト性である。まずは時間性であるが、定動詞 *haben* はあくまでも現在形であるから、現在時の出来事を表わす現在時制の文である。そして *haben* のアクツイオーンスアールトは、「所有」という意味からうかがえるように状態性である。他方の過去分詞は、*öffnen* も *meißeln* も完了相的な意味をもつ動詞から作られているため、「開けられた」、「彫り込まれた」という結果的状态を表わしていることがわかる。

したがって構文全体としても、局所的に見ても状態性をもった文であることがわかる。独和大辞典では、この2つの例はつぎのように状態受動文にパラフレーズすることができると記されている。¹²

a') Unser Laden **ist** heute bis 8 Uhr **geöffnet**.

b') Sein Name **ist** in Marmor **gemeißelt**.

例 a)、b) では、もともと対格目的語であった名詞が主格主語に格上げされ、受動的行為は、被動作主が被る行為終了後の結果的状态となって表われている。a)、b) 文において主格主語 (*wir*, *er*) で表わされる人がここで被動作主と所有関係を表わす名詞句となっている (*unser Laden*, *sein Name*) のは、両者の関係が過去分詞の意味作用領域に直接係わりがないからである。このようなパラフレーズが可能なのは、もとの a)、b) 文では、主格主語と対格目的語とで表わされる所有関係よりも、対格目的語と過去分詞で表わされる被動作主と行為の関係のほうが重要であることを意味する。もとの a) では「店が8時まで営業している」、b) では「大理石に名前が刻まれている」という結果的状态が重要なのである。したがって、*wir* と *den Laden*、*er* と *seinen Namen* のあいだに想定される行

11 池内 2010年、4 ページ以下。

12 『独和大辞典』1990年、同ページ。

為性は背景に追いやられている。

こうして、全体として例 a)、b) 文では、上位に「現在性」「所有性」「状態性」が、下位の「受動」的關係のなかに「結果相」が内包されるという意味構成となっているとまとめられる。しかしまた情報伝達の観点に照らして言えば、現在時制をとった結果状態構文と呼んだ方が良いように思われる。

さて古高ドイツ語の例に戻ると、再分析を起こす前とみなされる例は、使用される動詞が過去分詞形をとることで、対格目的語とのあいだに結果的状态が結ばれるというものであった（他に Tat.102.2, Tat.151.7, Tat.125.3/4等）。したがって、現代語の例で見るように、元来の姿はさしあたって結果相構文であったとみなすことができる。¹³ 例(1)では、時間、アスペクト的に言えば、対格目的語 *managiū guot* と過去分詞 *gisazt* とのあいだに「たくさんの蓄えが貯められた状態にある」という現在の結果的状态が前面に表わされていると言って良いだろう。それでは再分析を起こした後はどのように解釈することができるだろうか。つぎにここで整理した5つの意味単位（「現在性」「所有性」「状態性」「結果性」「受動」）がどのように変化したのかを見ていきたい。

3.2 「現在性」の残存

過去分詞が対格目的語とのあいだに結んでいた統語関係が主格主語とのそれに転じるということは、元来の「受動」的關係が消失することを意味する。例(2)の *sih „sich“* と *gieinot „geeinigt“* や、つぎに挙げる例(3)の *iz „es“* と *bithenkit „bedenkt“* を見ても、そこには意味論的に受動的関係を構成していないあるいは内包していないことは明白であろう。なお、過去分詞に使用される動詞は古高ドイツ語後期に入るまで他動詞のみであったが、後期には同様な解釈が成立する余地のない純粋な自動詞が用いられるようになった。¹⁴

13 例えば Schrodt (2004, S.16) は „Resultativkonstruktion“ という語を用いている。

14 Notker (11世紀初頭) では、*weinon „weinen“*, *sundon „sündigen“*, *dankon „danken“* 等が現われる。Vgl. Grønvik 1986 S.51.

また *haben* には「所有性」が失われたと指摘しなければならない。¹⁵ しかし語に脱語彙化が起きたからと言って、文中でのはたらきを完全に失ってしまったというわけではない。少なくとも人称や数などを表示する定動詞としての文法機能は—現代にまで—残存する。動詞本体で語彙的意味とその都度のアスペクト性が表示される一方、その定動詞性についてはことなつた部位、すなわち *haben* で表示されるという形式の特殊性については、のちに再び取り上げなければならない。所有性の消失については、所有の対象が、例(2)で見たように具体的所有物でなかつた (*sih „sich“*) り、(*ez* を伴なう) *thaz* 文で現われる例(3)¹⁶ のようなケースが見られたり、例(4)のようにまったく表わされないケースが散見されることから明々白々であろう。

- (3) **Eigun** sie iz **bithenkit**, *thaz sillaba in ni wenkit* (Otf.I.1.23) かれら (ギリシア人やローマ人) は一つも音節が欠けることのないように 気を配つたのです。
- (4) *Nu bigin uns redinon, wemo thih wolles ebonon, / wenan thih zelles ana wan, nu gene al eigun sus gidan?* (Otf.III.18.36) お前が自分を誰と比較しようとしているのか、本当に自分のことを誰だと思っているのか、われわれに言いなさい。いまや誰もが皆そのようになった (=死んでしまった) というのに。

それでは「現在性」についてはどうであろうか。ここで言う現在性とは *haben* 完了文が現在時制であるという意味であった。歴史的に見て、総合的形態の時制形式には現在時制と過去時制しかなく、過去領域の出来事以外は全て現在時制を用いなければならなかつた。古高ドイツ語の

15 Schrodtt 2004, a.a.O. しかし Kuroda は、*haben* の意味体系のうち受益性 *Benefaktivität* の働きが残ると考えている。古高ドイツ語の *haben* 完了では、主格主語に *vorhanden sein* という意味役割が付与されると見なされる。Vgl. Kuroda 1997, S.290ff., Kuroda 1999, S.55f.

16 この例に見られる所有を表わす過去現在動詞 *eigan* は欠如的 (*defektiv*) で、現在完了の歴史の初期にしか関与しなかつた。*haben* とは異なる語であるが、現在完了の用例とみなされるのがふつうである。Vgl. Besch 2009, S.152. 例(4)等も同様。

例には、動詞行為が、客観的時間ではとらえにくい普遍的、あるいは時間外的に位置づけられる用例が Otf rid で 3 例、Tatian で 1 例見られた。¹⁷ 一例のみ挙げておく。

- (5) Sie sint filu redie sih fianton zirrettine; / ni gidurrun sies biginnan, sie **eigun se ubarwunnan** (Otf. I. 1. 76) 彼ら (フランク族) は、敵から身を守る用意ができています。決してそれ (戦い) をしようとしません。彼らは彼ら (敵) を 撃退してしまう のです。

ここは、フランク族がいかに武勇にたけているかを強調するくだりである。フランク族がこれまで多くの敵を撃退してきたことだけを述べているのではなく、Kelle の注釈からうかがえるように、現在や未来の出来事を含めた内容となっている。¹⁸ これらの例は、haben が現在時制であることを示す一つの根拠となると考えられる。

また、当該文に使用される副詞のなかに現在性を表わすものがある。例 (4) のように、現代語の „nun“ にあたる nu が用いられる例が、つぎの 2 例にも見られる。

- (6) in sumen thuruh thia era ist uns ther scaz mera, / bi thiu **habet** uns iz selbo got hiar forna **nu gibilidot**, / natura in uns ni fliehen ioh zi ebine giziehen. (Otf. III. 3. 21) また別の人々のところでは、名誉に与かるためにわれわれは富を重んじる。それゆえ神は自ら今この前でわれわれにつぎのことの手本を示して下さっているのだ。すなわちわれわれの血統をないがしろにしないこと、また平等であると見なすことを。
- (7) Laz iz sus thurh gan, so wir **eigun nu gisprochan** (Otf. I. 25. 11) どうか私が 今話した とおりにしてください。

17 Otf. Ad Lud. 71f. (2 例), I. 1. 76; Tat. 28. 1. 他の例は金子 (2009 年、112 ページ) を参照。

18 „die Feinde wagen es nicht (den Kampf) zu beginnen, und wenn sie ihn beginnen, so haben die Franken dieselben auch schon überwunden.“ Kelle 1963, S. 637.

例(6)は、百人隊長のしもべの病気をキリストが癒すヨハネ書4章46節以降に関連した箇所であり、どう解釈するべきかを作者 Otfrid が解説している。公平な存在であるはずの人間が隣人に対して偏った考えや態度をとらないように、王の息子の場合とはことなり、百人隊長のしもべのところへは行こうとしたというキリストの行ないについてである。例(7)は、イエスがヨハネに洗礼を施してほしいと懇願する箇所である（マタイ書3章15節）。これらの例では、現在時における状態あるいはやや幅のある現在時での出来事が示されている。

一方でコンテクストに注目すると、Tatian では全用例が、Otfrid では94%が現在の環境で出現するというデータがある。¹⁹ これは現在の叙述のなかで、あるいは現在性が含意される状況で haben 完了文が現われるのがふつうであることを意味する。うえて挙げた例(5)や例(6)のようにより並列的な文接続のほかにつぎのような例が現われる。

- (8) senu nu andero fimui ubar thaz **haben gistriunit**. (Tat.149.4) ご覧ください、今や私はそのうえ別の5（タラント）を手に入れました。
- (9) In thir **haben ih mir funtan** thegan einfaltan, / ther ouh unkusti ni habet in theru brusti. (Otf.II.7.55) 御身の中に、胸のうちにごまかしの気持ちを決してもたない純真な勇者を私は見出した。
- (10) Hiar mugun wir instantan (thaz **eigun wir ouh funtan**), / thaz quement ummahti fon suntono suhti, (Otf.III.5.1) われわれはここで、からだの病気は罪の禍から生じるものであるということが分かるのです。このことをわれわれはまた認識して知っているのですが。

例(8)は財を与えられたしもべが試される譬えがなされる場面（マタイ書25章20節）であるが、冒頭にラテン語の *ecce* にあたる命令形 *senu* („siehe“) が用いられている。相手に対する注意喚起がなされたあとにつづいて、何らかの過去の出来事に言及するばあい、— 例(4)の命令

19 Tatian では6例中6例、Otfrid では36例中33例。コンテクストのとらえ方や用例の換算法等については金子（2011年、31ページ以下）を参照。なお同所では haben, sein 両方の現在完了形（直説法のみ）が対象となっている。

文につづく例も同様に—現在時に立ってその出来事が扱われなければならないであろう。つぎの例(9)は、イエスがナタナエルに対して述べた言葉の冒頭部である(ヨハネ書1章47節)。せりふの出だして過去の出来事に言及される場合、現前の現在の状況に結びつけられる必要がある。また、例(10)は、聖書物語の内容に作者が解釈を加える第3巻第一章の冒頭であるが、校訂本で括弧が付されている通り、作者 Otfred 自身による補足的発言のさいに haben 完了が用いられている。挿入文のなかでコメントが加えられる場合、話者が居合わせる発話状況が付随的に前面に現われるであろう。

今述べたような現在の環境に現われる例は、当該文で過去の出来事が述べられていても、テキストの流れとしては現在のであって、その視点に立って述べることが求められる箇所での用例であると言えるであろう。ただし現在の環境に現われる haben 完了の例それじたいが現在性をもっていることの直接的な根拠となるわけではない。同様なコンテキストでも従来は過去時制を使用せざるを得なかったからである。当該形式が、テキスト内で現在性が内包されるべき位置に、極めて高い割合で現われるという点が、形式に現在性が備わっていることを想起させてくれると控えめに言わなければならない。

従来の研究では、Eroms (1997, S.31) や Oubouzar (1974, S.12/14) が、古高ドイツ語期の haben/sein 形式を、現在時制をもつ形式であったと明言している。

4. 再分析のさいに生じた意味的变化 その2

4.1 結果状態性

さて問題となるのは「状態性」と「結果性」である。再分析前の「状態性」とは、haben の語彙的意味に含意されるアスペクト性というだけでなく、対格目的語との関係でみとめられる過去分詞のそれでもあった。再分析後、うえて指摘したように、haben には所有性が失われた。このことは、同時に haben に内包される状態性の消失を意味すると考えて良いであろう。したがって、複合形式を構成するもう一方の過去分詞にこ

の意味の表出を求めなければならないことになる。しかし過去分詞のアスペクト性を考えるとき、この状態性とは「結果性」の一部を構成していると考えることができる。つまり「状態性」の表出は、過去分詞が一手に引き継ぐことになったと言えよう。以下、過去分詞の意味論として「結果状態性」を出発点とする。

ここでまず注目しなければならないことは、再分析を経ることで、過去分詞が担う意味のおよぼ範囲が大きく変わってしまうことである。再分析前に認められた結果状態性とは、対格目的語で表わされる事物に対してのアスペクト性であった。例(1)では、「たくさんの蓄え」(managiuguo)が「貯められた状態にあった」(gisazt)ことが述べられている。しかしそれがhaben完了へと改新を起こした場合、過去分詞は主格主語との関係を結ぶようになるわけだから、考察されなければならないのは行為者に対してのアスペクト性である。問題となるのは、「お前」(ここでは表記されていない)が「たくさんの蓄えを貯めた」という行為者と行為との関係である。つまり結果性が現われているかどうかの判断基準は、行為を受ける対象ではなく、主格主語で表わされる行為者である。

再分析後の状況をも含めてhaben形式に結果状態アスペクトを認めるのは、Leiss (1992, S.272)やKuroda (1997, S.299ff.; 1999, S.54ff.)、Eroms (2000, S.28)ら比較的最近の研究においてである。他方で、早い時期にこの意味が失われ、動詞行為を表わすようになっていったとするのはPaul (1958, S.137)やDal (1966, S.121)らである。ここでは、3.1節で現代語の例で結果状態性のあり方を分析したのと同じように、別の結果状態文にパラフレーズして考えてみたい。例(2)、例(3)の語順等を書き換えてよりシンプルな文にした例(2')、例(3')で考察をすすめる。

(2') ther liut **habet** sih Kristes todes **gieinot**

> „Leute sind über Christi Tod einig“

(3') sie **eigun** iz **bithenkit**, thaz sillaba in ni wenkit

> „die Silbe fehlt bei ihnen nicht“

例(2')は、民衆がキリストの死について見解が一致している現在の状況を表わしていると考えることができる。したがってここに示したような、

einig sein で書き換えることが可能となる。一方で例(3')では、使用動詞 *bedenken* に関係のある語を使って書き換えることが難しく、熟考した内容が結果的に成就しているという表現にしかならない。ここに想定される結果性とは、例(2')の場合の行為者と行為とのあいだに生じる結果性とはことなる。

例(3')の場合、現代語の例で見た *geschlossen* や *geschmeißelt* のように、「閉じた」から「閉まっている」とか、「彫り込んだ」から「彫られてある」という動詞行為の完結によって物理的に引き起こされた結果性とはことなる。「見解が一致した」のであれば、何か別の出来事によって状況が変えられない限り「見解の一致」は継続するが、「熟考した」からと言って、その内容が実現するかどうかは明らかではない。ここでは、ギリシア人、ローマ人の文学作品は、脚韻が整い、音節の長短を測ることで甘美なものに仕上がっていることが述べられている。この場合の結果性はコンテクストとの関係から初めて看取されるものである。

しかし、つぎの例(11)や、さきに挙げた例(6)、例(7)では、今述べたようなどちらの結果性もまったく現われない。

- (11) Er **habet** in thar **gizaltan** drost managfaltan / fon sin selbes guati, so sliumo so er irstuanti (Otf.IV.15.55) そのお方はそこで彼らに、その方が復活なさるやいなやご自身のやさしさから生じるさまざまな慰めのことを伝えられた。

この例は、ヨハネ書14~17章あたりにあたる箇所のうち、イエスが死んでも悲しまずに彼自身の教えを守るよう弟子たちに諭す場面である。イエスが復活すると、弟子たちは彼がいないと悲しむことはなくなり、永遠に喜びに包まれるとこのあと続く。そこでは *quad „er sagte“* と過去形が用いられる。コンテクストを考慮しても *habet ... gizalt („hat ... aufgezehlt“)* という形式を用いることで、行為者(er)と行為(zellen)とのあいだには結果性は生じてはいないことがうかがえる。同じように、例(6)で *habet ... gibilidot („hat ... vorgebildet“)* が表わしているのは、キリストの行ないによる例示を通じて、われわれが正しい隣人愛をもつべきであるという教えを神が示したという動詞行為そのものである。この場合、

われわれが聖書を読むたびに、その内容を思い出すたびに繰り返し例示してくれるという普遍性を含意しているとも言える。例(7)は、受洗してもらいたいというイエスの発言を受けて用いられた *eigun ... gisprochan* („haben ... gesprochen“) である。過去の一回限りの行為を表わしているとしか言えないように思われる。

結果性が現われるか現われないかについては、使用動詞のアクツィオンスアールトが関わっていると考えられる。ここで見てきた動詞のうち、とくに *bithenken* (例(3)) や *(gi-) bilidon*²⁰(例(6)) あるいは *(gi-) sprehan* (例(7)) は、少なくとも変容相 (transformativ) あるいは限界相 (terminativ) をもった動詞とは言えないであろう。この場合、過去分詞形が作られても、主格主語とのあいだには動作終了後の結果性が感じられにくいと考えられる。他方で、アスペクト性がよりはっきりしている動詞を用いた例(4)や例(8)では、コンテクストの意味からも明らかに結果的状态を表わした文であると言える。

(4) *gene al eigun nu gidan* > „jene alle sind nun tot“

(8) (ih) *haben andero fimui gistriunit*

> „ich habe/besitze andere fünf (Talente)“

例(4)は、イエスの言葉に不信感を抱いていたユダヤ人たちが、彼に対して懐疑的な返答をつづけるヨハネ書8章の後半部である。アブラハムや預言者たちでさえも皆死んでしまった今、自分の言葉を信じれば死を

20 この *bilidon* もつぎの *sprehan* も、Piper や Kelle の辞書では接頭辞 *gi-* がついた形で見出し語が挙がっている (Piper 1887, S.37/439; Kelle 1963, S.170/221)。周知のようにこの接頭辞はゲルマン語期から完了相化の働きをもっていた。しかしこれらの例に見られる語形があらかじめ *gi-* 付きの形での過去分詞なのか、過去分詞を作るために単純語に *gi-* が付加された形なのかは厳密には不明である。また古高ドイツ語、中高ドイツ語にわたって *kommen* や *finden* などの過去分詞に *gi-/ge-* が付加されなかった事実を鑑みると、過去分詞形成のための *gi-/ge-* にも、完了相化の働きを残していたと考えるべきかもしれない。Kuroda (1997, S.298f.) を参照。なお Kuroda (1999, S.29) は、どちらの動詞も *gi-* なしの単純語の使用を想定しているが、*bilidon* を完了相動詞、*sprehan* を継続相動詞に分類している。

味わうことがないとする彼の言葉は矛盾であると見なされる。この箇所
の *duan „tun“* は、代動詞的な用法で „sterben“ を意味する。²¹ 自動詞的な
用法であるが、行為者が死んでしまったことだけでなく、死んだ結果、
彼らの存在が失われているという結果的状态が表わされていることがう
かがえる。例(8)で用いられている動詞 *gestiunen* は „gewinnen“ を意味
する。5タラント与かった者は、商売をしてさらに5タラントを儲ける
のであるが、実際に稼いだお金を示しながら発言している。行為者であ
る自分は、稼いだ金をもっているという結果的状况のなかにいるのである。
完了相であることがより明確なアクツィオンスアールトをもつ場
合にはこのように、過去分詞形で結果性が現われると考えられる。例(8)
や例(10)で、*findan „finden > erkennen“* を用いた例も同様である。

しかし、そのような動詞であっても、結果性がやはりあまり感じられ
ないケースもあると考えられる。

(5) *sie eigun se ubarwunnan > ? „sie sind ihnen überlegen“*

(12) *Den tod, then habet funtan thiu hella joh firsluntan, / diofo
firsuolgan joh elichor giborgan.* (Otf.V.265f.) 地獄が、死を生み出
し、これを飲み込んでしまい、そして深く食いつくし、また永遠
に覆い隠してしまったのである。

例(5)は、すでに述べたように、フランク族の優越性を強調するくだり
であるが、*eigun ... ubarwunnan* によってこれまでの繰り返しの動詞行為
を表わしている。Kelle の注釈にあるように、敵が攻撃を仕掛けるたびに、
フランク族はすぐに彼らを撃退してしまうという完了的行為の反復が見
られるに過ぎない。例(6)と同じような例と言えよう。

また例(12)は、地獄を引き合いに出すことで天国の卓越性を強調して
いる箇所である。4つの動詞は *findan „finden > ersinnen“*, *firslantan*
„verschlucken“, *firswelgan „hinabschwelgen“*, *gibergen „verbergen“* といずれ

21 Kelle (1963, S.178) の注釈ではこの箇所に „gestorben sind“ と現代語訳をつけて
いる。

も比較的明確な完了相動詞である。これは主格主語が人間でないため、ややわかりにくい例かもしれないが、最初の3例には結果状態が読み取れない。例えば findan の場合、地獄が死を生み出すことによって死が存在し始めるという結果性を想定してみても、それは地獄が与かる状態であると断定できるわけではない。(3')で見たような間接的な結果性となるだろう。この例では少なくとも最初の3つの動詞行為は、一回限りの行為を時間的連続性のなかで表わしているに過ぎないように思われる。

Grønvik の調査によれば、haben 完了に純粋な継続相動詞が用いられるようになるのは、古高ドイツ語後期の Notker においてである。²² 継続相以外の動詞が過去分詞となる場合、そこには結果性が見込まれる。しかしいま見てきたように、少なからぬ例において、一場合によっては変容相あるいは限界相といった完了的意味がはっきりした動詞においても一過去分詞形で文に組み込まれるとき見込まれる結果性は表に現われないことがあった。過去分詞の機能から結果性が導き出せるという論理は、行為者と行為のあいだに認められる結果性ではないという点で、haben 形式が担う機能的意味であるとは言えない。つまり、再分析前に、過去分詞が対格目的語とのあいだに100%生み出されていた結果状態性は、主格主語との関係を結ぶようになって間もなく、一つの意味用法 (Bedeutungsvariante) となっていたと考えて良いのではないかと思われる。

この点についてはつぎのことが関係していると考えられる。過去分詞と対格目的語とのあいだに求められる局所的なアスペクト性は、行為完結後の結果性だけが問題となるため、つねに同時的關係が成立している。しかし過去分詞が主格主語との関係を結ぶことによって、行為には行為者との関係が生まれる。ここには、「～を行なった」という完結した行為じたいも関与してくる。このことは同時に行為が生起する時間、すなわち過去のあるいは前時的關係が視野に入ってくることを意味する。冒頭の ich habe das Buch gefunden の例で言うと、再分析前の状況であれ

22 Grønvik 1986, S.51. 他に嶋崎 (2004年、108ページ) 等。注14で挙げた動詞を参照。他方で Kuroda (1999, S.29) は、Otfred に現われる4種の他動詞を継続相動詞とみなす: horen „hören“ (1例), meinen „bestimmen“ (4例), sprehan (1例 (=例(7)), zellen (1例 (=例(11)))。

ば「本は見つかった状態にある」となるが、再分析後の場合「私が本を見つけた」あとの現在の結果状態が言われているのか、「私が本を見つけた」という過去のある時間における完結的行為のみが意図されているのかは、コンテキストの時間的連続の中で読まなければ明確にはならない。再分析後の動詞行為の意味を考えると、行為者との関係が絡んでくることによって、文の事態がどのように捉えられているかという観点のもとで、行為のアスペクト性だけでなく、時間性もが観察されなければならないため、²³ 結果性が見極めが難しくなる。

このように見てくると「古高ドイツ語では haben + 過去分詞結合は結果相構文である」²⁴ との主張にはどうしても部分的修正が必要であることになる。haben を用いた形式は、元来的には結果相構文であった。その後、古高ドイツ語中期までには再分析を被り、過去分詞が主格主語との能動的関係を結ぶようになって haben 完了の歴史が始まるが、間もなく過去分詞のアスペクト意味論だけでは説明できないような用例が出現するようになった。さしあたってこのような道筋がつけられるであろう。結果相構文は、古高ドイツ語後期のより純粋な継続相動詞の使用が始まる前にそのアスペクト表示機能が曖昧化していったと推測される。われわれは古高ドイツ語中期の haben 形式の意味分析では、動詞行為の結果性だけでなく完結性、あるいはまた時間性、すなわち前時性ないし過去性を問題にしなければならないことになる。

23 Leiss (1992, a.a.O.) は、haben 形式に継続相 (additiv) 動詞の使用が増加することで、それまで完了相 (nonadditiv) 動詞で作られていた二段階性 (Zweiphasigkeit) が失われ、それゆえに時間的な解釈があらたに生じたと考えている。この推移を「アスペクト的に完結した (aspektuell abgeschlossen)」から「時間的に完結した (temporal abgeschlossen)」への展開であると特徴づけている。

24 Eroms (2000, S.28)、Kuroda (1999, S.60f./118f.; 1997, a.a.O.) も同様であるが、過去分詞のアスペクト表示機能だけでなく、注15で指摘したように、haben に残存する意味役割も形式全体の意味論のなかに統合して分析している。したがってつぎのような精神活動を表わす動詞の例も、受益者が主語である結果的状态に帰せられる：
Haben ih gimeinit, in mutate bicleibit, / thaz ih einluzzo mina worolt nuzzo. (Otf.I.5. 39) 「私は、ひとりで自分の人生を送ることを決心したので、心に決めたのです。」

連のない結果性を見込む必要はなかった。古高ドイツ語期に再分析を被ったあと、後期になって純粹な継続相動詞が現われるまでは、動詞行為のアスペクト性についてはこの3つの現われかたがあったと考えることができる。この3タイプの意味表示すべてに見られる共通点は、動詞行為 (Verbalereignis) が完結する境界がつねに含意される点である。形式に還元するならこれは過去分詞の意味機能であると言って良い。すなわち、この時期の haben 完了は完結性 (Abgeschlossenheit) を供給するはたらきをもっていた²⁶とすべきではなからうか。

さて、4.1節では、結果状態性の所在を調べるために、主格主語で表わされる行為者との関係を判断材料にして分析を行なった。その結果、今述べたように、結果性がつねに見込まれる完了相動詞が使用されていても行為者はその状態に与かることがない場合も見られた。このことは、haben 形式に想定される結果状態性とは行為者との関係だけでみとめられるものではないことを意味する。また、行為者と関係づけられるのは、動詞が表わす動詞行為じたいであって、この関係がもとになってアスペクト性や時間性が問題となってくるのではないかと述べた。アスペクト性に密接に関わってくる時間性についてもう少し見ておきたい。

ここで言う時間性とは、まずは再分析後主格主語が表わす行為者が視野に入ってくることで動詞行為に関わってくると考えられる「過去性」ないし「前時性」である (4.1節を参照)。しかし他方で、文意味とコンテクストを分析することで、当該形式に「現在性」が備わっている可能性を指摘した (3.2節を参照)。厳密に言えば、haben 完了を用いた文が現在時制としての価値をもつという現在時制性である。形式に認められるこの2つの時間性は、一見折り合わないように思われるが、実際には一つの単位のなかに組み込まれている時間的要素である。

動詞行為から見ていくと、うえでは haben 完了はアスペクト性として完結性を生み出すはたらきをもつと述べた。これは、結果性が現われるにしてもそうでないにしても、動詞行為の外側にある観点が存在し、行

26 しかしc)のような場合でも、行為が完結したこと (「話し終えた」) が重要であるのか、生じた行為そのもの (「話した」) が重要であるのかはその都度の状況でことになってくると考えられる。

為はそこから眺められることを暗示している²⁷と理解することができる。このことを時間軸上に当てはめて考えてみると、「外側」の観点とは、動詞行為が完結した時点より前に置かれることはないため、同時か後時的な位置に置かれる観点であると解釈することができる。ここで、現代語の時制論を、動詞体系の変遷についての実証的な歴史研究に取り入れた Oubouzar (1974) の考察を例にとって明確化したい。

どんな動詞の事象 (Vorgang) も、時間的に捉えると、時点 a、b で区切られる区間すなわち中間段階 (Mittelphase) で表わされ、a までは前時段階 (Vorphase) が、そして b のあとには後時段階 (Nachphase) が続く特徴をもつとされる。そして、「中間段階がどの立脚点 (Standort) から観察されるか」²⁸によって時制の用法が決定される。現在時制、過去時制、未来時制の場合、立脚点はつねに中間段階に存在するが、具体的には、立脚点が発話時と同時に位置するか、前時か後時かでそれぞれの時制が決まる。体系的な対を成す残りの3つの完了形では、動詞行為の「事象ないし状態のあと」の段階が表現されるとある。²⁹ 現在完了の意味論にアスペクト性が付加されることで、「現在時制の完了階梯」(Vollzugstufe des Präsens) という新しい呼称を提案している。

なお、この理論は Fourque (1969) に基づくものであると述べられているが、現在では例えば Flämig の時制論に息づいている。「立脚点」とされるのは、3点間の時間関係で時制を説明した Reichenbach (1947) の参照時点 (point of reference) に相当し、Helbig/Buscha らが文法書に取り入れ、現在完了の記述とした Ez < Sz, Bz を想起させる。同じくこれを視線の問題とした Engel の「回顧的視線」(Rückschau-Perspektive) や Erben の「回顧的」(retrospektiv) という用語もまた、軌を一にした見解によるものであることが垣間見られる。³⁰

27 結果性とは動詞行為の完結から看取される含意的意味である。これが前面に現われる場合であっても、実際に言語的に明示されるのは、結果的状态それじたいではなく、これを引き起こす動詞行為のほうである。

28 „... von welchem Standort aus diese Zeitlinie betrachtet...“ Oubouzar 1974, S.8.

29 „...die Phase nach dem Vorgang/Zustand...“ 立脚点は後時段階に位置すると考えられるが、そのようには説明されていない。Oubouzar 1974, S.9.

30 Flämig (1991, S.386ff.), Helbig/Buscha (1994, S.144ff.), Engel (1988, S.450),

さて、このような態度に基づいて、古高ドイツ語期の調査では資料として Notker が用いられている。そして sein/haben 形式は、動詞の過去の行為ではなく、現在の一般的な状況 (allgemeiner Tatbestand)、発話時に有効である状況 (zur Zeit des Sprechaktes gültiger Tatbestand)、あるいは動詞行為から導かれた現在の状態 (präsentischer Zustand) を表わすと説明される。³¹ 個々の用法に見られる「状況」とか「状態」とは、現在時制の意味論だけでなく、他方で過去分詞の意味論が想定されると言える。古高ドイツ語では「過去分詞はいつも結果相アスペクトを伴う動詞によってつくられる」と述べ、ge- のついた動詞の過去分詞が結果相と分類してあることからそのことが分かる。³²

ここでのアプローチは過去分詞の結果相アスペクトを軸にしている一方、定動詞 haben/sein の現在時制としての機能 (前述参照) から「現在性」を導き出している。動詞の過去の行為のほうは、相対的にみとめられる前時的性質をもったものと見なすことができる。こうして動詞行為についてはつねに「過去性」を帯びていることになる。ただし古高ドイツ語の具体的な例文分析では、彼女の言う立脚点と動詞行為との関係については何も述べられていない。

さて、本稿 3.2 節の例文分析で見たように、動詞行為の置かれる位置が過去領域に限られるわけではないため、これに付随する観点も時間的に現在時以降のあるいは普遍的な位置をとると考えられる。したがって、より厳密には、完結性をもつ「前時的」な動詞行為が、「後時的」な観点から眺められるという相対的時間をもつ意味単位ができることになる。動詞行為それじたいの時間性が重要なのではなく、動詞行為と視線を与える後時的な観点でできるこの意味単位が haben 完了の核を構成していると考えられる。ライヒェンバッハ風に時間関係のみを表わすとつぎ

Erben (1974, S.86) 等を参照。なお、Ez は Ereigniszeit、Sz は Sprechzeit、Bz は Betrachtzeit の略号である。

31 Oubouzar 1974, S.14f.

32 Oubouzar 1974, S.11. 彼女が調査対象とした Notker (第3巻第3部) からは halten „halten“ (836.15) や sundon (783.11) などが抽出されているが、これらの継続相動詞であっても、やはり過去分詞で gi- がつくことによって結果相の意味が得られると考えているのであろう。注14及び注20を参照のこと。

のようになる。³³

Ez < Bz Bz < Sz

こうして、haben 完了が担う個々の要素の機能的側面、すなわち一方では後時的な観点を与える段階が haben の現在時制で表わされ、他方で過去分詞が生み出す完結性が統合されるイメージが作られる。³⁴ アスペクトとしては、結果性が現われることが多いものの、さまざまである。再分析を被ったあと古高ドイツ語後期に至るまで haben 完了は、「完結的な行為を伴った現在時制の形式」として発展していたと単純化して良いのではなからうか。

5. 結び

haben + 過去分詞は、再分析を被ることで haben 完了の歴史が始まる。それが一つの構造単位をもった形式として早くに自立し始めていたことは、本稿で示した通り、明らかである。そのさい haben は「所有」という元来の語彙的意味を失うことを代償に助動詞化を進める一方で、過去分詞は対格目的語との「受動」関係を失って主格主語との能動関係を結ぶようになった。本稿では再分析前に確認される意味「現在性」と「結果状態性」(<「結果性」+「状態性」)がとくに検討された。

33 2つ目の関係 Bz < Sz は、Bz が発話時かそれ以降に位置することを意味するが、時間軸を必要としない普遍的あるいは超時間的な用法までは示しきれていない。

34 分析的形式 (Analytische Form) として発展する sein 受動、sein 完了、また werden 受動は、語彙的意味が相対的に強くない語 (sein, werden) に助動詞化が生じる。反対に、語法の助動詞の場合、基本的に元来の語彙的意味を基盤にして発達した。どちらの場合も、もともと持っていた意味あるいは文法機能の枠内から出発した展開であり、さしあたって個々の要素をそのまま足し算式に合わせることから一つの構造的意味を追究することができる。haben 完了は構造上の大きな変化が出发点となるため、これらのパターンとは異なる。とくに古い時代の例を見る場合、本稿の態度のように、文意味から出発して、各形態の本来的な意味機能に照らして考察する手法が基本であると思われる。

古高ドイツ語全般にわたって **haben** 形式が「結果状態性」を表示する構造をもっていたと見なされるのは、この時期の後期までこの形式に使用される動詞の大部分が広義の完了相であったことが一番の理由に挙げられる。完了相動詞の過去分詞は結果相を生み出すからである。この理論的出発には異論の余地がないであろう。しかし、主格主語で表わされる行為者と行為との関係を基準にして見ていくと、動詞行為に想定される結果状態性は、必ずしも現われるというわけではないことが示された。その理由は、使用される動詞のアクツイオンズアールトが明確な完了相でないケースが徐々に増えていき、**haben** 形式がさまざまな環境で用いられるようになったからと言える。しかしまた再分析において構造的転換はスムーズになされたのに対し、意味論上の転換はこれに追いついていないという姿も垣間みられるのではないか。

再分析前に局所的に見られたアスペクト性とはことなり、再分析後では、行為者と行為と中心にして構成される事態全体におけるアスペクト性が問題となる。この転換では、当該文における行為の時間軸上の位置づけはもとより、発話状況を含むコンテキストの時間的な流れも視野に入ってくるはずである。文の時制的価値としては「現在性」を中心とした、**haben** に残存する現在時制性であることを見たが、それは動詞行為の時間性ではなく、これを眺める観点を提供する時間段階であった。しかしまさにここで、動詞行為（＝過去分詞）と密接な関係を結ばなければならない行為者（＝主格主語）の文法上の表示がなされるのである。逆に言えば、動詞行為の時間性とは、完結性表示が含意される相対的な前時性であり、定動詞で人称と数とともに拘束的に表示される時間性ではない。すなわち、行為者に関する時間性と動詞行為に関するそれは同レベルにあるはずであるのに、形式的にことなる部位で表示され、生み出される時間指示内容もことなったアンバランスな構造となっている。**haben** 形式は、形式的には一つの統語単位を作っていたが、—結果性が現われるにせよ、現われないにせよ—その動詞行為は行為者に関する物理的時間の流れとは直接関係のないアスペクト性を表示した。

古高ドイツ語後期に入り、純粋な継続相動詞が用いられるようになると、この形式は、後時的視点を伴う完結性や結果性の表示のみならず同時的視点を持った意味用法をしだいに獲得していくことになる。すな

わち、アスペクトではなく、「過去」(＜「前時」)という時制的解釈の可能性が高まっていったと考えられる。³⁵しかしそれ以前の早い時期には、habenの機能化が早いスピードで進んだのに対し、過去分詞は元来のアスペクト表示を多かれ少なかれ残したが、拡大されるはずのその作用領域のなかでは機能化することなく、その都度の時間・アスペクトのコンテキストのなかで本来的ではない意味表示を許していたことが読み取れる。このことはまた時制的解釈への道を暗示していると考えることができるともかもしれない。

[テキスト]

Otfrid von Weissenburg: *Otfrids Evangelienbuch*. Herausgegeben von O. Erdmann. 6. Auflage. Tübingen: Max Niemeyer, 1973.

Tatian. Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar. Herausgegeben von E. Sievers. 2., neubearbeitete Ausgabe. Paderborn: Ferdinand Schöningh, 1966.

[参考文献]

Behaghel, O.: *Deutsche Syntax*. Eine geschichtliche Darstellung. Bd.II. Heidelberg: Carl Winter, 1924.

Besch, W. / Wolf, N. R.: *Geschichte der deutschen Sprache. Längsschnitte – Zeitstufen – Linguistische Studien*. Berlin: Erich Schmidt, 2009.

Brinkmann, H.: „Sprachwandel und Sprachbewegungen in althochdeutscher Zeit.“ In: *Studien zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. Düsseldorf: Schwann, 1965, S.2-236.

Dal, I.: *Kurze deutsche Syntax*. 3. Aufl. Tübingen: Niemeyer, 1966.

Ebert, R. P.: *Historische Syntax des Deutschen*. Stuttgart: Metzler, 1978.

Engel, U.: *Deutsche Grammatik*. Heidelberg: Julius Groos, / Tokyo: Sansyusha, 1988.

Erben, J.: *Deutsche Grammatik*. Ein Abriss. 11., völlig neubearbeitete Auflage. München: Max Hueber, 1972.

Eroms, H-W.: „Einfache und expandierte Verbformen im frühen Deutsch.“ In: Eichinger, L. M. / Leirbukt, O. (Hrsg.): *Aspekte der Verbalgrammatik*, Hildesheim / Zürich / New York: Olms, 2000, S.9-34.

Flämig, W.: *Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge*. Berlin: Akademie, 1991.

35 Leiss (1992, a.a.O.) を参照。

- Grønvik, O.: *Über den Ursprung und die Entwicklung der aktiven Perfekt und Plusquamperfektkonstruktionen des Hochdeutschen und ihre Eigenart innerhalb des germanischen Sprachraumes*. Oslo: Solum, 1986.
- Helbig, G. / Buscha, J.: *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig et al: Langenscheidt, 1994.
- Kelle, J.: *Otfrids von Weissenburg. Evangelienbuch. Text, Einleitung, Grammatik, Metrik, Glossar*. Dritter Band. Glossar der Sprache Otfrids. Aalen: Otto Zeller, 1963. (Neudruck der Ausgabe 1881)
- Kuroda, S.: „Zum System der Partizip II-Konstruktion im Althochdeutschen.“ In: *Sprachwissenschaft* Bd.22 Heft 3. 1997, S.287-307.
- Kuroda, S.: *Die historische Entwicklung der Perfektbildungen im Deutschen*. Hamburg: Hermut Buske, 1999.
- Leiss, E.: *Die Verbalkategorien im Deutschen. Ein Beitrag zur Theorie der sprachlichen Kategorisierung*. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1992.
- Nübling, D. / Dammel, A. / Duke, J. / Szczepaniak, R.: *Historische Sprachwissenschaft des Deutschen. Eine Einführung in die Prinzipien des Sprachwandels*. 2.Aufl. Tübingen: Gunter Narr, 2008.
- Oubouzar, E.: Über die Ausbildung der zusammengesetzten Verbformen im deutschen Verbalsystem. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 95, 1974, S.5-96.
- Paul, H.: *Deutsche Grammatik*. 4.Auflage. Bd. IV. Halle (Saale): VEB Max Niemeyer, 1958.
- Piper, P. : *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss der Grammatik*. II. Theil: Glossar und Abriss der Grammatik. Freiburg i. B: J.C.B. Mohr, 1887.
- Schmidt, W.: *Geschichte der deutschen Sprache. Ein Lehrbuch für das germanistische Studium*. 9. Auflage. Stuttgart: S. Hirzel, 2000.
- Schrodt, R. : *Althochdeutsche Grammatik II. Syntax*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2004.
- Streitberg, W.: *Gotisches Elementarbuch*. 5. und 6. neubearbeitete Auflage. Heidelberg: Carl Winter, 1920.
- Zeman, S.: *Tempus und „Mündlichkeit“ im Mittelhochdeutschen. Zur Interdependenz grammatischer Perspektivensetzung und „historischer Mündlichkeit“ im Mittelhochdeutschen Tempussystem*. Berlin / New York: Walter de Gruyter, 2010.
- 池内宣夫 「完了形と所有・結果状態構文の間」 In：西日本独文学会『西日本ドイツ文学』第22号、2010年、1-16ページ。
- 萩野蔵平 「助動詞表現と文法化の歴史」 In：日本独文学会『ドイツ語助動詞構造の

- 歴史的発展をめぐって』（日本独文学会研究叢書015号）、2003年、57-66ページ。
- 金子哲太 「現在完了の『主観的』意味について — 通時的考察にもとづいて —」
In：東北ドイツ文学会・日本独文学会東北支部『東北ドイツ文学研究』第51号、2008年、87-104ページ。
- 金子哲太 「現在完了の非過去の用法について — その通時的考察 —」 In：阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第51号、2009年、109-128ページ。
- 金子哲太 「現在完了の語用論的意味について — 古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけて」 In：日本独文学会『ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ — 歴史的発展における駆流とその反動』（日本独文学会研究叢書081号）、2011年、20-44ページ。
- 国松孝二他編 『独和大辞典 [コンパクト版]』、小学館、1990年。
- 嶋崎 啓 『ドイツ語現在完了形の歴史的変化』、九州大学（博士論文）、2004年。
- バンヴェニスト, É. 『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳、みすず書房、2000年。

Über die „Reanalyse“ des *haben*-Perfekts

— Wie hat sich die Konstruktion semantisch umorganisiert? —

Tetta Kaneko

Zur Diskussion habe ich im vorliegenden Beitrag die strukturelle Erneuerung bei der *haben*-Konstruktion „haben + Partizip Perfekt“ in ihrer frühesten Entwicklungsstufe gestellt, wobei vor allem die Analyse ihrer temporalen sowie aspektuellen Bedeutung den Schwerpunkt bildete.

Über den Entstehungsprozess des *haben*-Perfekts stimmt man normalerweise in solchem Punkt überein, dass es sich hier ursprünglich um die präsensliche, prädikative Partizipialkonstruktion handelt: Also zum Beispiel entwickle der Satz wie „ich habe das Buch gefunden“ aus dem „ich habe das Buch als ein gefundenes“. Im Allgemeinen gab es diese „Reanalyse“ wahrscheinlich im Frühalthochdeutschen. Dabei

geschah es zwar ein Diathesenwechsel und die Konstruktion verlor daneben ihre innewohnende lexikalische Semantik „Possessivität“ (und zugleich teilweise diesbezüglich aspektuelle „Stativität“), aber ihr temporaler Wert „Präsens“ blieb nach wie vor übrig, letzteres wovon meine kontextuell untersuchte Analyse einigermassen bestätigt hat.

Aus der Untersuchung der einzelnen Belegen in einigen althochdeutschen Korpora wird mir eine Schlussfolgerung gezogen, dass in der frühen Zeit das *haben* bei der Neukombinierung schon ziemlich rasch zur Auxiliarisierung kam, während das Partizip Perfekt jedoch sich der neuen Struktur entsprechende, funktionstüchtige Semantik kaum geschaffen hat. Die durch seine Partizipbildung zutage zu kommende „Resultativität“ des perfektiven Verbs kann man teils gut erkennen, teils aber kaum, vielleicht schon dadurch, dass trotz ihrer strukturell fernliegenden Stellung die Semantik des Partizip Perfekts auf das Satzsubjekt bezogen werden musste.

Ehe im Spätalthochdeutschen zum *haben*-Perfekt das imperfektive Verb zur Verwendung kam, konnte jenes nämlich in seinem neuen Wirkungsbereich schon seine eigene *aspektuelle* Funktion nur mangelhaft entfalten, was mir scheint, später bis zu einem gewissen Grade seine *temporale* Auslegung veranlassen zu haben.